

橘夫人物語（04・10・9）

井 垣 謙 三（昭17・3理乙）

古代鉄との巡り会い

法隆寺の解体修理工事で取り出された古代の釘が極めて健全で、そのまま再利用できるものも多いことを知ったのは、私がまだ中学生の頃で、七〇年以上も昔のことになります。朽ち果てぬ鉄に魅せられて、古代上質鉄の再現に努めている、現在の自分の出発点は、その頃にあったのかも知れないと思っています。

大昔の文献についてまず調べましたが、何と云っても一番手に入れたかったのは、来歴のはっきりした古代鉄の試料で、それについて各種の測定を実施することでした。

奈良薬師寺の有名な月光菩薩像は、一九五二年七月の吉野地震の際に、首が傾き、修理がおこなわれましたが、青銅の像には太い鉄の芯金が入れられており、この鉄芯を切断し

取り出しております。自然科学者としてこの修理に参画された西村秀雄京都大学名誉教授（故人、大4卒二部）が、材質調査の必要性を提言され、この鉄芯の一部を受領し調査されて、引き続き同大学に保管されていたものを、新しく展開された技術で再調査したいと依頼した処、快諾を受け、村上陽太郎教授（昭14卒理甲）を通じて受領し、再調査に供することが出来ました。

一二五〇年以上の長い歴史を持つ、由緒ある試料について、比較的早い時期に測定を実施でき、その後に薬師寺回廊再建用の素材について提言する機会にも恵まれ、五〇トンという工業的規模にかなり近い単位での生産に結び付いたのも幸いだったと言えます。

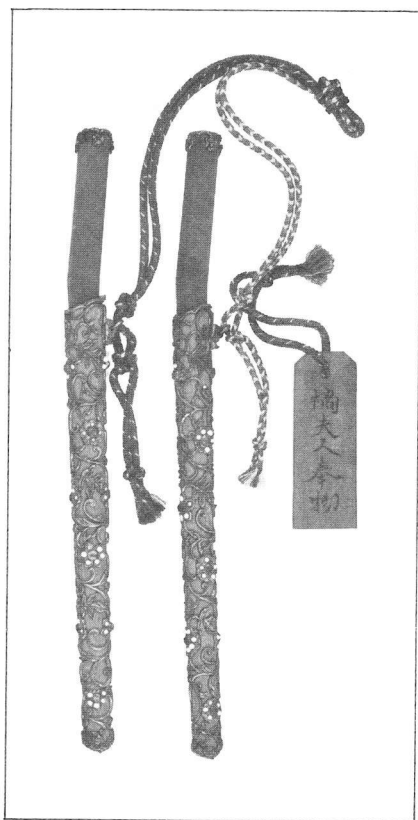
薬師寺の壮大な伽藍再建計画において、当初は古い和鉄を探し求めて使用されましたが、回廊再建の頃になるとそれも望めなくなり、西岡常一棟梁から託されていた、四国松山の鍛冶師の白鷹幸伯氏から当方に接触があり、鋼材組成についての当方の提言が容れられて、近代製鉄技術による五〇トンの生産に繋がりました。この素材の鍛冶師の間での評判は、私の想定を超えるもので、『平成の和鉄』とか『千年の釘』とかの名前が与えられて高く評価されましたが、更なる改善・向上を期待する実験続行の機会には恵まれませんでした。私の研究室では鉄を高純度に精製することを一つの研究課題としていましたが、得られた鉄の優れた耐食性・加工性には驚かされました。その優れた耐食性・加工性が古代鉄に

於いて見事に具現され、現代の量産工業鉄では殆んど失われているように思えるのでした。このようにして古代の鉄に魅せられて行つたのですが、正倉院展に展示されていた見事な刀子（とうす）に眼を奪われ、それに付けられた一枚の木札に書かれた文字にも心を吸い寄せられました。今回はこの木札にある橘夫人について言及したいと思います。

刀子（とうす）は消しゴム

刀子は正倉院の北倉に五口、中倉に六二口が伝えられていて、当時の文官がこれに組紐をつけて帯に吊るした一種の佩飾品（アクセサリーに近い）といえます。刀子は小刀の意味であり、片刃が普通ですからナイフに近く、その頃紙はまだ貴重品で、木札に墨書が普通でしたから、書き直しには木を削る必要があります、現代の消しゴム替りの実用目的を兼ねた装飾品として腰にぶら下げていたのです。時代が下がつて紙が普通に使えるようになり、木札が用いられなくなると、刀子はもはや不必要になり、その姿を消してしまいます。橘夫人奉物と明記された木牌が付けられている「犀角把白銀葛形鞘珠玉荘刀子」（さいかくのつか、はくぎんかつらがたのさや、しゅぎよくかざりのとうす）を図一に示します。鞘全体に銀製の透かし彫りの唐草形をまとうせ、緑玉に小真珠を配した花模様で飾られて

いる美しい作品で、正倉院の方の説明によると、聖武天皇の命日に収められた物とのこと
で、この橘夫人は橘諸兄の弟佐為の末娘で、名を古那可智（こなかち）といい、聖武天皇
の夫人だった人とのことです。橘少夫人とも言々と記している書物もありますが、橘氏は
藤原氏が権勢を一手に握ろうとする時、その前に大きく立ちはだかった最後の氏族であつ
て、藤原氏への対立意識はかなり強かった筈で、自ら少夫人と名乗る理由はありませんか
ら、この少夫人という名前は、明らかに藤原氏側によって付けられた呼び名であると言え



図一 犀角把白銀葛形鞘珠玉荘刀子
(正倉院展目録より)

るでしょう。

刀子三本が一組にされた黒漆三合鞘刀子では、斑犀、沈香、紫檀で作られた把の部分には明治時代に大幅な補修が加えられ、研ぎ直しも行われました。その後には手を加えられていないにも拘わらず、百年有余を経た今日、見事に保たれているその輝きは多くの人の驚きです。刃元の金象嵌の文様に全く乱れが見られないことから、これまでも研ぎらしい研ぎは殆んど加えられていないことが知られるとのことです。

その他、多くの刀子がありますが、いずれも長さ二〇cm程度あるいはそれ以下の小さいもので、刃長は大きい物でも約一〇cm、多くは七cm前後ですが、装飾の極致を集めたその華麗な姿に魅了される人も多いようです。

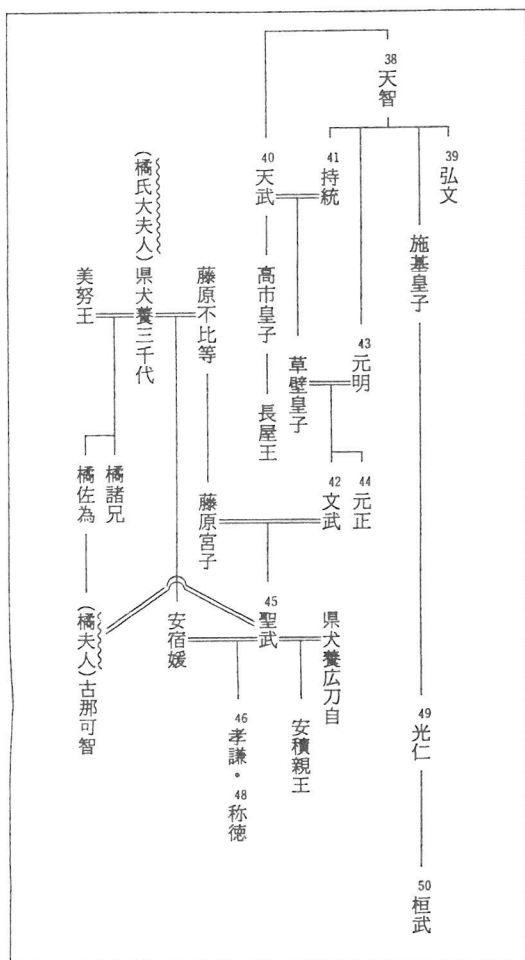
二人の橘夫人

私自身ある時期、古代の刀剣についての書物を漁っていて、古本市で刀子に言及したのを見付けましたが、それにはこの木牌の橘夫人を光明皇后の母に当る縣犬養宿弥（あがたいぬかいのすくね）橘三千代であるとしていました。立ち読みで一応済ませましたが、やはり買って置こうと考えて、翌日もう一度出直しましたが、既に買い手が付いたらしく

入手できませんでしたが、明治初年刊行の和綴じの本でした。その頃にはこれが一般に広く受け入れられた見解であつたらしいことは理解できましたが、どうしてなのかと不思議に思いました。

三千代は備達天皇の玄孫美努（みの）王の正室で、葛城王（後の橘諸兄）、佐為王（全橘佐為）らの母でしたが、美努王の筑紫太宰率を命じられての九州への赴任（持統八年、六九四）が一つの転機となつてか、前からも仕えていた持統天皇の後宮での活躍の場を次第に拡げて行きます。不比等は娘の宮子を入内させようと後宮の実力者に近付き、三千代の方も天武・持統の流れの皇位を維持する狙いからか、両者の間に強い協力関係が成立し、宮子の入内が実現します。その翌年の文武二年（六九八）の詔によつて、鎌足に賜つた藤原朝臣の姓を継ぐのは不比等の流れだけに限定され、他は元の中臣の姓に戻されています。三千代と不比等との間の強い協力関係は、やがて強い愛に変わり、三千代は不比等の後妻になり、大宝元年（七〇一）には二人の間に安宿媛（あすかひめ、後の光明皇后）が誕生し、同じ年に宮子は文武天皇との間に首（おびと）皇子（後の聖武天皇）を得ています。藤原・橘氏関連の系図を図二に示しました。三千代と古那可智とは血の繋がった祖母と孫娘との関係になります。

在位十年足らずの文武天皇が若くして崩御され（七〇七）、母の元明天皇が即位される。



図二 橘氏・藤原氏関連の系図

その翌年、武蔵の国から銅が産出して献上されたことを祥瑞（しょうずい、天から下された目出度いしるし）として和銅と改元しましたが、その秋の藤原宮での大嘗会（だいじょうえ）の後の祝宴で、三千代は天皇から盃を受け、「橘」の姓を賜っています。その年の

美努王の死去を受けての配慮のように思われます。元明天皇の後、文武の姉の元正天皇と女帝が続いて、皇太子となっていた首皇子の成長を待ちますが、七一六年には安宿媛が皇太子妃に入っています。皇太子の外祖父であり、義父でもあつて、その王位継承を託されていたと思われる不比等が七二〇年突然病に倒れ、数日の病臥でその生涯を閉じてしまいます。

不比等の後を受けて政治を担当したのが長屋王で、壬申の乱の功臣で太政大臣をも勤めた高市皇子の嫡男でもあり、皇親政治の旗頭として次第に勢力を大きくしていきます。不比等なき後の勢力挽回に腐心する藤原氏側にとって、長屋王は頭の痛い存在であつたことは間違いないでしょう。

皇太子への早い機会の譲位を望んでいた元正天皇は、両眼の赤い白亀の献上を祥瑞として、神亀と改元し譲位します。聖武天皇の即位（七二四）を慶賀しての叙位で、長屋王は左大臣に、安宿媛は妃から夫人にと昇格しています。また、この時、天皇の生母の藤原宮子を大夫人と尊称するようにという勅が出されています。

大夫人尊号事件と長屋王の変

「大夫人と称するようにとの勅であるが、令による称号は皇太夫人である。一方に従えば他方に違反することになるから、どちらかに定めてほしい。」という奏上が、一ヶ月以上も経って長屋王からなされてきた。天皇の側近を固める房前を始めとする藤原氏の得意げな振る舞いに対する、長屋王らしい杓子定規な言い分による「ゆさぶり」と考えられます。「文字で表現する時には、令に従って皇太夫と書き、言葉では「おおみおや」と呼ぶように」として、事態は一応収拾されましたが、両者の間の感情的な「しこり」はむしろ決定的にさえたものではないうか。

長屋王と藤原氏との間の対立の行き着くところが長屋王の変（七二九）であり、密告により一挙に兵を出して長屋王の邸宅を取り囲み、一兩日の糾問の結果として長屋王を自縊させてしまっています。安宿媛と聖武天皇との間に、基王（もといのおう）という皇子を設け、生後一ヶ月で皇太子に立てながら、それを一年足らずで失ってしまった藤原氏一族の嘆き、焦りが推察されますが、長屋王という壁はどうしても除いておかなければならなかったのでしょう。

そして時代は天平へと移りますが、その元年（七二九）には藤原夫人の立后すなわち光

明皇后の出現になります。上のような経緯があつたためでしょうか、藤原氏は「大夫人」という称号には強い「こだわり」を示します。その上、古那可智という橘姓の夫人がいて、藤原氏と対抗する立場にありましたから、区別する必要もあつて、三千代に対しては橘氏大夫人という呼び名を常に用いています。その三千代も天平五年（七三三）には病を得て没しますが、その翌年には従一位という高い位を贈られています。

東大寺には光明皇后の発願になる写経が数多くあり、正倉院に残されていて、その巻末には両親の不比等と三千代の菩提のために写経したことが記されています。三千代の七回忌に当たる天平一二年（七四〇）のものには贈従一位橘氏大夫人のためと記されていて、太夫人あるいは大夫人のいずれにしても、この時期には藤原氏側が三千代を単に橘夫人とすることは考えられません。

法隆寺と橘夫人

法隆寺にある橘夫人厨子に収められた阿弥陀三尊の高雅な姿（図三）は古くから世に知られ、光明皇后の生母の三千代の念持仏とするのが普通になっていますが、刀子の場合と同じように、疑問点が残ります。法隆寺には、この他にも橘夫人に関連するものが数多く



図三 橘夫人厨子阿弥陀三尊像
(昭和大修理を了えた法隆寺目録より)

存在します。境内の東端に近く、中宮寺に接する所にある伝法堂と呼ばれる建物は、橘夫人がその屋宅を寄進したものといわれ、昭和の解体修理の結果、奈良時代の貴族の住宅と確認され、古那可智の寄進したものであることが明らかになっています。

境内の西北は小高い丘になっていますが、そこにある西円堂も奈良時代に橘夫人が建てて寄進したものと伝えられています。現在の建物は鎌倉時代のもですが、本尊は奈良時代製作の立派な薬師如来の座像で、病を癒やす靈験があるとされ、病の軽快を祈り、またその成就に感謝してか、いろいろな品物が奉納されています。不思議なのは、刀、槍、長刀、弓、甲冑などの武器類が数多く収められていることです。刀がとくに多く、現在でも数千本が赤錆びて倉庫に眠っているとのことでした。

天平一四年（七四二）二月と天平一八年（七四六）五月とに、橘夫人から法隆寺への大きな寄進が記録されています。法隆寺東院資財帳と呼ばれるもので（図四）、これには正三位橘夫人とあり、既に薨じ、従一位を遺贈されている三千代の可能性は完全に否定されます。古那可智は天平勝宝元年（七四九）四月に正三位から従二位に昇叙されており、その記録にも橘夫人とありますから、この寄進者が古那可智であることに疑問の余地はありません。

この資財帳は天平宝字五年（七六一）に作られたもので、末尾には高僧達の花押連署の

天平寶字五年十月一日

寧中道入 二二〇。一四

五一〇

○法隆寺緣起資財帳

法隆寺東院緣起佛經并資財帳所收佛

(大和國法隆寺所藏)

五副畫像靈山淨土壹鋪

具佛畫奉請聖法隆寺法師臨照

二副畫像補陀落山淨土壹鋪

具佛畫奉請聖僧祿連□□

上官王等身觀世音菩薩木像壹軀

金藤押

合經添伯添拾玖卷

上官聖德
法皇

有上官聖德法皇御持物(年號)天平九歲次丁丑二月廿日、藤氏皇后宮推寬奉請坐者、

大般若經壹部

六百卷
法六十枚

高朴軸
楊錦領

大寶積經壹部

一百廿卷
法十二枚

高朴軸
青錦領

藥師經肆拾玖卷

木繪軸

洪五枚秘錦領

正三位
夫人

有天平十八年歲次丙戌五月十六日、正三位橘夫人宅奉請坐者、

法華經壹部

七卷
法一枚
并大唐者
奉請聖法隆寺僧法進

心經壹卷

以金馬可沉書紙
請聖法隆寺僧賢真

図四 法隆寺東院資財帳第一葉

(奥書)

此流記者院家規模也、紛失之後不知幾年、

于時保安二年三月廿六日、自從僧源朝之手、

始傳得之、田舍小屋雜反古中散在云、

無翅飛无足步也、悲喜相交感淚難禁者歟、

乞寺僧院僧等、固守護之、重莫令紛失矣、

(史)

別當長史少僧都法眼和上位經尋敬以安置之

図五 法隆寺東院資財帳奥書

ある信頼度第一級の貴重な資料ですが、一度紛失して保安二年（一一二一）に反古の中から発見されていることが、その奥書（図五）に記されています。「羽根なくして飛び、足なくして歩むなり……」と、発見の際の喜びが文面に躍るようです。

法隆寺の再興を計った勸進僧の行信や光明皇后と並んで、法隆寺に莫大な寄進を行い、後には自らの居宅をも寄進して、法隆寺に居を移して後生を念じた橘夫人が古那可智であることには、疑問の余地はないと言えるでしょう。

橘氏一族とその子孫

三千代の子の葛城王と佐為王は天平八年（七三六）聖武天皇に上奏し、皇族の籍を離れ、母の姓橘を継ぎ、それを末長く伝えたいと願い出て許され、橘諸兄、橘佐為となります。その頃は武智麻呂を始めとする不比等の四人の子が廟堂の中心になっていましたが、天然痘の大流行に四人が相次いで倒れるという思いもかけない展開で、参議から大納言へと一挙に昇進した橘諸兄が政権を握ります。異父兄妹という関係もあって、光明皇后の厚い信頼を得たのでしょうか、二十年近くも諸兄体制を維持することに成功しています。古那可智の父 橘佐為は正四位下中宮大夫まで進みますが、藤原四子と同じ年に死去しています。

諸兄の子橘奈良麻呂は、藤原仲麻呂の権勢を排除する為に決起しようしますが、密告されて逆に肅正されます。世にいう橘奈良麻呂の変（七五七）で、これに関連してと思われませんが、古那可智らは橘の姓を名乗ることを禁じられ、広岡の姓を与えられています。藤原仲麻呂も、失った権勢を取り戻そうと、挙兵を計りますが露見して敗死します。藤原仲麻呂の乱（七六四）ですが、その時正倉院から多くの武器が持出され、失われる結果になったことは取り返しのつかない大きい損失でした。国家珍宝帳に記載されていた百本近い太刀のうち、対応して現存するのは僅かに一・二本に過ぎません。

橘奈良麻呂の孫である橘嘉智子は、嵯峨天皇の皇后で、仁明天皇の生母です。才色兼備で知られています。嵯峨野に檀林寺を建立し、唐より僧義空（ぎくう）を招いて、始めて禅を伝えるのにも貢献しましたので檀林皇后とも呼ばれます。また弟の右大臣橘氏公（うじきみ）と共に学館院を設立して、橘氏の子弟の教育に尽くしており、その後橘氏から多くの優れた学者を輩出していることに結び付いていると思われ。皇后の従兄弟にあたる橘逸勢（はやなり）は書に秀で、嵯峨天皇・空海とともに日本三筆の一人として有名です。平安時代の初期には、このようになり勢力を取り戻し、藤橘源平（ときつ・げんぺい）との四字熟語を残しますが、あまりにも強大な藤原氏の権勢に抗すべくもなく、衰えていきます。橘氏の衰退とともに庇後を失った檀林寺は廃絶してしまします。

その檀林寺の跡に、足利尊氏が建立したのが天龍寺なのです。

橘三千代と興福寺西金堂

藤原氏の氏寺は興福寺であり、光明皇后は母三千代を失った時、興福寺に西金堂を建立することとし、皇后職が中心となつて推進し、翌年の命日に落慶式が上げられています。西金堂は莊嚴の仏世界を現出しようとした精巧贅美をきわめた仏殿であつたことが、記録に残されています。三千代の遺愛の品の主要な物は、当然この西金堂に納められていたものと考えられますが、目録のような記録は全然残されていないようです。

興福寺はその後何回も火災に遭いますが、治承四年（一一八〇）平重衡による南都焼討ちによつて、壊滅的な損害を受けます。西金堂の焼失を知つた九条兼実が「西金堂を失うことは、我が藤原氏の滅尽に等しい」と嘆いたといわれています。橘夫人の古那可智を祖母の三千代にすり替えようとする動きは、この西金堂の焼失に深く関連し、これより後の鎌倉時代になつてからのことと思われるす。

特定の有力な庇護者を持たない法隆寺は、維持経営に困窮し、興福寺の傘下に入つたこともあるようですが、寺宝を出開帳したり、献上したりして、時の権力者から寄進を得る

願真

聖德太子傳私記上

亦名古今
目錄抄

太子御生年廿九辛酉二月始造船宮御

卅三乙丑年十月始遷船宮給云

造上宮王院給事者御生年廿二歲或卅

四歲云或天平十一年己卯武口御代行

此金堂内太子御時自悉布薩等在之員

長
修竹也

上宮王院者太子御住所故名上宮王院見二卷即船宮也
御夢殿有二說或云自太子御世八角或云聖武皇帝之時
改被成八角昔方角殿字云々然而只自太子御時正八角

黑深須麻坐光明皇后之母
次西戸方有厨子橘大夫人所造也内在藤施古帳藤勒三尊以
三尊云
金銅敷地作波文中生蓮花三本其上合坐三尊太子已後
者也 高八尺

ことに成功します。鎌倉時代も後半になると、太子信仰が盛になって安定してきます。
橘夫人厨子は橘三千代が作らせたとする言い伝えの根拠は、聖德太子伝私記（図六）に
あります。この書の著者は事務僧の願真で、正直に私記と書いています。好きなように何

図六 聖德太子伝私記

とても書けるわけです。私記では、光明皇后の母と註を入れ、橘夫人の造る所なりと続
けています。この私記の刊行の後、いろいろ残っていた筈の法隆寺関係の古い記録が全部
無くなっていることが明らかになります。私記だけの勝残りということになりそうですが、
そう簡単には限りません。三千代と法隆寺との接点が多くないのに対して、古那可智と法
隆寺との接点は非常に多いことを考慮に入れて置くべき点です。

一方、興福寺西金堂を失った藤原氏は、三千代の遺愛の品とするに相応しい芸術品や仏
像を探し求めていたと思われます。法隆寺の橘夫人厨子を入手しようとしても、その交渉
は成立せず、そこで、この阿弥陀三尊像は三千代が造らせた物だということを法隆寺側が
承認してくれば、法隆寺に相応の寄進をするということで解決したとすると、なかなか
の知恵者だと思えるのですが、これは深読みに過ぎるのかも知れません。

二人の橘夫人の寄与を明瞭に識別するには、まだもう少しの時間を必要なのかも知れま
せん。

(以上)

(東北大学名誉教授)